The Japan Society for Culture in English

『リア王』の Nothing について

——『法華経』の「空」との比較において

亦部　美希

1．序論

シェークスピア（William Shakespeare）作『リア王』（1605-06）[1] の主要なテーマの一つは "Nothing" である。悲劇の発端は、リアが王国を三人の娘に彼への愛情の多寡で分けようとし、末娘コーデリアが "Nothing, my lord"（1.1.84）と答えたことにある。リアは "Nothing will come of nothing"（1. 1. 85）と答え、末娘の愛情表現を解さない。リアは怒りにまかせコーデリアを勘当する。一方、姉娘ゴネリルとリーガンはリアに取り入り国を二分してもらう。しかし、二人はリアを裏切り、元国王の権威をも剥奪し嵐の夜に追いだしてしまう。それに反し、リアを深く愛しているコーデリアは、夫のフランス軍を頼みにリアを復位させるため戦争を起こすが、敗戦し殺される。救いなき悲劇（不条理演劇）と呼ばれる。『リア王』にはメインプロットとしてのリアの悲劇の他に、サブプロットとしてのグロスターの悲劇もある。グロスター伯爵は、庶子エドモンドの言葉に騙され、嫡子エドガーを殺そうとする。逃げたエドガーはこじきに身を落とす。グロスターもエドモンドの策略にかかりすべてを失い、あげくの果ては、リーガンと夫コーンウォールによって眼をくりぬかれてしまう。

『法華経』の「空」は広い解釈がなされるが、[2] 本稿は、以下第一、第二の特徴的側面と、第三の、「空」を理解してはじめて解されるという『法華経』（中 71，440-42）の、[3] ものを見る姿勢について、特徴的表現を比較の対象とする。第一、第二は、『佛教語大辞典』の「空」の意味の表現のうち、『法華経』を出典とする箇所から引用した。第三は、『法華経』の文中の表現である。第一の特徴は、自分の存在と世界についての想定が恒存的であるという考えの否定である。第二の特徴は、破壊された後何もないことである。第三の特徴は、あらゆるものに心の感覚が届くようにすることである。

本稿の目的は、このように『リア王』の悲劇の発端となった "Nothing" についての思想と、『法華経』の「空」との共通点に着目し、両者が一致する

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

点としない点を比較考察することにある。

2.『リア王』の "Nothing" と『法華経』の「空」との比較について

『リア王』で描かれる "Nothing" は『法華経』「空」に共通して、自分と世界についての想定が恒存的であるという考えの、否定を意味している。第一に、『リア王』の登場人物は、自分と世界の想定を失う、第二に、シェークスピアはこれに意義を見出している。

哲学者で詩人のサンタヤーナ（George Santayana）は、著書、*Interpretations of Poetry and Religion* の "the Absence of Religion in Shakespeare" の中で、シェークスピアが "Nothing" に意義を見出し、人間の生命を、意味も設定（背景）も何もないものとして描いていると言う。

> For Shakespeare, in the matter of religion, the choice lay between Christianity and nothing. He chose nothing. . . . He depicts human life in all its richness and variety, but leaves that life without a setting, and consequently without a meaning.（152-154）

第一に、たしかに、『リア王』では、リアとグロスターは設定や意味を失い、その状況は "Nothing" と表現されている。仔細は次の通りである。王座を得たゴネリルが、リアをこれまでのリアのように扱わない時、リアの自己の想定は崩れ始める。リアは "This is not Lear: . . . ,"（1.4.233）"Who is it that can tell me who I am?"（1.4.238）". . . for by the marks of sovereignty, knowledge, and reason, I should be false persuaded I had daughters."（1.4.241）と述べるからである。そして、このような状態のリアは、道化に "thou art nothing"（1.4.202）と称されるからである。さらに、盲目のグロスターが、エドモンドに裏切られたことと、自分が殺そうとしたエドガーに何の罪もないことを知った時、グロスターは生きる場所（世界）について、設定と意味を放棄している。なぜならば、グロスターは行くべき道を求めず、(たとえ目が見えていたとしても)現実世界を見ることを放棄しているからである。グロスターは "I have no way, and therefore want no eyes . . ."（4.1.18）と述べる。結果として、リアは "Nothing" の、グロスターは "No way" の状態に陥る。

第二に、『リア王』は "Nothing" から "Everything" を追求する意義を持つ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

劇である。例えば、盲目のグロスターが "I have no way, and therefore want no eyes; I stumbled when I saw" (4.1.18-19) "Our means secure us, and our mere defects / Prove our commodities." (4.1.20-21) と述べるからである (122)。これは、人は行くべき道を求めない時、生きる場所（世界）についての想定を放棄するとき、つまずかなくなるとの表現である。つまずかなくなることとは、すべてが見えていて想定外の障害に出会わなくなることである。

その証拠に、下記のようにリアは "Nothing" になった後に、グロスターはエドモンドの奸計を知り "I have no way" と感じた後に初めて、見えるもの、感じるものが増えていく。真実が見えてくる。以下グロスターの台詞 "I have heard more since:" はこれを強調している。

LEAR. . . . . O I have ta'en
Too little care of this . . . .
Expose thyself to feel what wretches feel,
That thou mayst shake the superflux to them
And show the Heavens more just. (3.4.32-35)

GLOUCESTER. I' th' last night's storm I [a beggar-man] saw
Which made me think a man a worm.
. . . ; and yet my mind
Was then scarce friends with him. I have heard more since: (4.1.32-35)

Let the superfluous and lust-dieted man,
That slaves your ordinance, that will not see
Because he does not feel . . . . (4.1. 67-69)

上記のように、リアとグロスターは共通して、これまでものの区別などを想定したために、関心をもたなかった "wretches" や "a warm" とされる人々に共感し始めているのである。 従って、『リア王』において、"Nothing" の表現は「空」と共通し、自分や世界の存在についての想定が恒存的であるという考えの、否定を意味している。シェークスピアはこれについて、"Everything" に向かって視野が広がるとの、意義を見出している。

多くの批評家が『リア王』の思想のうちに、言葉、価値の世界など、世

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

界や自分についての恒存的な考えについて、シェークスピアの奥深い意識が見られると、指摘してきた。スカルスキー（Harold Skulsky）は多くの批評家がコーデリアをキリストになぞらえる点を指摘する。キリストのコーデリアは、ものの価値を値段から尊厳へ、外的価値から内的価値へ再定義するという（Skulsky12）。たしかに、コーデリアの多くの台詞は、スカルスキーの引く聖書の言葉に似つかわしい。スカルスキーの挙げている一例は次の通りである。“He that hath helps [Lear] take all my outward worth”（4. 4. 10）は“Is not the life more worth than meat and the body more of value than raiment?”（Matthew 6:25）と一致する（13）。他方、シェークスピアが仏教から影響を受けていないのは明白であるが、仏教が言葉を含む一切を「空」とする点は特異であり、一考に値する。思想家の岡は哲学的見地から東西の無のイメージを相対化しつつ、仏教史的「無」「空」と、『リア王』の“Nothing”の類似点を挙げた。救出にきたコーデリアに許しを請うリアの台詞、“I am a very foolish fond old man, . . .” “I fear I am not in my perfect mind”（4.7.60, 63）「俺は愚かな老いぼれ、・・・気も確かとは言えぬらしい」（156）を、[5] 岡は台詞の意味を追って、仏教文化の、「空」や「無」のイメージと結びつける（102-06）。『仏教語大辞典』によると、「空」とは「存在するものには、自体、実体、我などとうものはないと考えること」、「自我の実在を認め、あるいは我および世界を構成するものの永久の恒存性を認める誤った考えを否定すること」である（278）。無とは「経験以前、知識以前の純粋な人間の意識」である（『大辞典』1311）。故に、岡は、リアが己を「愚か」と思い、気が確かでないと感じることが、自分と世界への認識の正しさを認めない点で、「空」「無」の思想に近いとするのである。ヴァーモント大学名誉教授のハウ（James Howe）はシェークスピアの思想と仏教思想が重なりあっている点を挙げている。ハウは、リアが自分の持っていた自己と世界についての想定を失うことで、仏教の理想の囚われのない状態に向かっていると述べる（182-84）。たしかに、リアは、王としての自己が破壊された後、人が皆同じけものであると述べるなどして（3. 4.101-108）、権威や社会的慣習にとらわれなくなっていく。

ブルック（Peter Brook）は、「空」の思想「我および世界を構成するものの永久の恒存性を認める誤った考えを否定すること」が、『リア王』の中に読み取れる可能性を、髣髴とさせる。ブルックは人間が日常生活と、想像世界の二つの世界で生きていることをシェークスピアが感じていると述べるか

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

らである。

> Shakespeare, knowing that man is living his everyday life and at the same time is living intensely in the invisible world of his thoughts and feelings, developed a method through which we can see at one and the same time the look on the man's face and the vibrations of his brain.（The Shifting Point84）

さらに、ブルックはシェークスピアの洞察力の深さに共鳴する。エドガーが自殺を図る盲目の父グロスターを救うため、父に平地を崖と思い込ませ、安全に身投げさせる場面に、次のように言及するからである。"When Gloucester imagined to suicide down the cliff, he does not see the cultural and factual world in blindness, darkness but the imagined world."（Reeves 320, an interview with Peter Brook）このように、ブルックは現実世界と縁を切った、グロスターの中の、想像的世界の一人歩きを表現する。従って、ブルックの説は、観客が恒存的で当然とする現実なるものが、実際、想像世界にしかすぎないことを感じさせる。『法華経』の「空」の説は、想像的世界が現実世界そのものの表現であるとの考えを疑う点で、上記ブルックの説に共通する。『法華経』の原文「愚かさのために盲目となっている人々はかの生まれつき盲目の男と同じであると見做されるべきである」(『法華経』上 293)、「眼を閉ずれば則ち得、眼を開けば則ち失う」(7)[6] などの「目がみえなくなって真実がみえるようになる」というパラドックスの表現は、盲目のグロスターの表現と同様であり、日常と離れ、想像的世界の存在を注視する表現のメカニズムだからである。

これと同様、イーグルトン（Terry Eagleton）の説では、『リア王』は歴史や文化に見られるような、人の想像的傾向が、行き過ぎて物質的生活そのものを侵害することを描いているという（76-83)。たしかに、劇中では、リアは王の威厳や権威という、目に見えぬ想像的なものを守りたいために、これを傷つけるわが子ゴネリルを心底、呪うのである。"Blasts and fogs upon thee!/ Th' untended woundings of a father's curse/ Pierce every sense about thee!"（1.4.308-10）

『リア王』を題材にした黒澤明の『乱』(1985) も、自分と世界への想定の失敗という盲目さのために、物質的生活で破滅していく様子を表現してい

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

る。まず、『乱』は盲目の男が仏の絵姿を誤って落とすところで終結し、『乱』は『リア王』同様、秀虎（リア王）の息子たちが破滅に向かう筋である。次に、これを平山（ケント）は「人間は幸せよりも悲しみを、安らぎよりも苦しみを追い求めているのだ」と締めくくり、盲目の男は、その「人間」を象徴するからである。

ブライズ（R.H.Blyth）は、著書『禅と英文学』（1942）で、「空」と似つかわしい、禅の思想を『リア王』に読み取っている。本稿は、ブライズが禅の思想をいかに『リア王』の中に読み取っているかを記述し、その思想と「空」の共通点を論述していく。第一に、ブライズは禅の観念を次のように説明し、それは「空」と似つかわしい。"I lived in the Mind, not in the world of particulars. I by myself perceived Truth. . . . , to see all things as spiritual beings, above all, myself as such."（147）すべての存在を "spiritual beings" とすることは、存在するものに実体を認めない点で、「空」の説「存在するものには、自体、実体、我などとうものはないと考えること」（『大事典』278）と一致している。第二に、ブライズは、リアが嵐の夜、何もかも失った時の台詞を引用しつつ、以下のように述べている。

. . . Lear says,

> The art of our necessities is strange,
> That can make vile things precious.

The absolute value of things is infinite; our minds, which change according to our necessities, decide that things are vile or precious.（431）

上記のように、ブライズは、すべての存在を心の想像の出来事とし、それを恒存的な存在や実体と誤解したり，囚われたりしなければ、物事の価値が無限にあるこという、禅の思想が『リア王』に盛り込まれていることを読み取っている。ブライズは上記『リア王』の中に恒存的な存在や実体があると誤解しない考えを読み取っていて、それは「空」の説でもある。

本稿は以上の先行研究をふまえ、このようなシェークスピアの "Nothing" についての思想と、『法華経』の「空」の思想に、以下の関連性があることを論述する。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

コーデリアの "Nothing" は、これに類似する台詞 "No cause" (4. 7. 75) を使うことで、劇全体の主題と一貫性を保っている。

リアが姉娘たちにけもののように捨てられ、もうリア王でなく "Nothing" であると称される中、リアは、救出に来たコーデリアに、彼女が自分を憎む「理由」"cause" があると言う。しかし、コーデリアは「理由はございません」"No cause" と答え、劇の冒頭で "Nothing" と愛情を示した同じ方法で、何も言葉で言うことはないことを、示すからである。

このように、"Nothing" の表現の意味が深まる点は、上記のようにリアがコーデリアと同じ境遇になった時、コーデリアが理由無くリアを愛することにある。コーデリアが劇中のリアと同じ悲惨な境遇を経て、"No cause" という "Nothing" と関連する台詞を述べるが、同じ境遇を味わうリアとの対話を通して具体的に表現されているからである。

コーデリアは愛する父リアに、呪われて勘当される。リアは、誰もがそうであるように最も愛されたいにもかかわらず、愛されないもっとも見下げ果てた人間に成り下がり、自分が犯した誤りに気づき始めコーデリアにいう。"Pray you now, forget and forgive : I am old and foolish." (4.7.84) と言う。その結果、リアは "Everything" は "Nothing" から生まれることを身をもって悟る。なぜならば、この時、コーデリアが理由なくリアを愛し "No cause" と述べ、理由なき愛情はすべてのものに注ぐことのできる愛情だからである。

3.『法華経』の「空」の思想

まず、『リア王』と『法華経』の比較考察にあたって、下記シュミットの言説を参考に、仏教の経典『法華経』の、実際性という点のみを考察する。

思想家のクルト・シュミット (Kurt Schmidt) は仏教そのものの実用的側面についてこう説明する。「ブッダが人類に遺産として残した教えは、何ら神である世界創造主や... 宗教的な教義や教理も知らない」、「(むしろ) 宗教的な教義を... 信心深く受け入れることをするなと注意したのである」、「(仏教は) 宗教という語が伝来の意味で用いられるかぎり、(宗教) とは言えない」(シュミット (Kurt Schmidt) , 9. ズィークムント (中村友太郎訳) 10) と述べるからである。

次に、『法華経』が理想とする「空」などの思想につき、本稿は実践的な三つの特徴を取り上げ、比較考察の対象とする。『法華経』の「ないこと」

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

の思想である。「空」は「すべてもものは・・・直接的、間接的諸条件によって現在あるようなものになったのであるから、そこに本体ないし実体と称すべきものがない」(『法華経』中 367) ことである。[7] ここから、本稿は実践的な三つの特徴を取り上げる。第一の特徴は、自分の存在と世界についての想定が恒存的であるという考えの否定であり、「自我の実在を認め、あるいは我および世界を構成するものの永久の恒存性を認める誤った見解を否定すること」(『大辞典』278) である。それは「一切のものは同じで、本体がなく、本質的に相違のないことを知り、またこれらのものを望まず、また、そのいずれをも決して区別して見ない」(上 299) ことであると考えられる。[8] 第二の特徴は、「破壊された後、何もないこと」(『大辞典』278) である。「空」は「有無等の対立を否定する」ものの見方をして (『大辞典』278)、「破壊された後、何もないこと」という意味を含むのである。第三に取り上げる、『法華経』の特徴は、世界の人々などに共感できるようになることである。具体的には、心の届く範囲を延ばすことである。また、『法華経』に登場する「完全に清浄」な肉体は鏡のように世界を映し、本人はそのすべてを見るが、清浄な体を持たない者は他者の姿や世界が見えない。共感できないものは見えないのである (下 119-121)。

4. 『リア王』の "No cause" の思想と「空」の思想の関連性について

次にシェークスピアの "Nothing" の思想の表現と、「空」の特徴的表現、それを表す『法華経』の比喩表現等を考察し、本質的に一致する点と、相違点を探っていきたい。『法華経』が存在などものの区別を否定するのと同様に、リアも自分や世界についての区別を失っていく。リアは、最初に人間とけものの区別、次に罪人と罪なき被害者の区別を失う。第一の、リアの、自分と世界についての区別の喪失は、自分が人間と認められるか、下劣な獣と認められるかどうか区別し、その区別を失うことにある。リアが区別を失うことは、『法華経』原文の「良医の譬喩 (アウパミア)」の表する、第一の「空」の特徴、自我と世界について恒存的だと思っていた考えを覆す点、第二の破壊された後、何もない点、第三の心の感覚を伸ばす点に共通する。

リアは自分が高貴な人間であって、賤しいけものとの違い (区別) があることを自負している。その証拠は、二人の姉娘らが権威を笠にきて、リアのお付きの騎士の数を減らす競の場面で現れる。リーガンの「(騎士が) 一人

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

でも必要かしら」の最後の一声に、リアが次のように言う。

O, reason not the need; our basest beggars
Are in the poorest thing superfluous.
Allow not nature more than nature needs.
Man's life is cheap as beast's.（2. 4. 266-69）

この台詞は、高貴な人間と賤しいけものとは違うとの区別こそが「余計なもの」であること、そして、「余計なもの」へのリアの執着心を明らかにしている。

『法華経』の「良医の譬喩」（下 23-29）の目的は、「仏の寿命の久遠常住」の開眼であり（下 455）、注釈者は、「（述べられている）仮定の事実は、実に下手」と主張している（下 387）。本稿はここに、他の意味も込められていることを読み取る。それは、愛されない、頼るものがないなど「何もないこと」が、想像世界の、自我と世界の恒存的な定義のないことを、悟る契機であるという意味と、「心の感覚」を延ばすという意味である。

釈迦如来を表す「良医」は、毒で意識が転倒していて薬を飲まない子供たちに、薬の色、味、香よさを理解させ、服用させようと、自分が死んだと告げる。病苦の子供たちは「慈しんでくれた、ただひとりの人」（『法華経』下 27）が死に、頼るものがないと述べ、薬を飲み正常になる。さらに、比喩の説明で、釈迦如来は「人々は理性が転倒して愚かであり、余（釈迦如来：真理）がそこに立っているにわからず、余を見ることができない」（下 31）と述べている。これは頼るものがなくなり、追い詰められはじめて、「空」の第一の特徴「恒久と思った、世界と自分への考えを、捨てること」ができることを意味すると考えられる。「世界と自分への考え」が恒存的だと思っていることは「意識の転倒」だからである。また、薬を飲んで回復した状態に、『法華経』の第三の特徴、「心の感覚」を延ばそうとする理想が読み取れる。なぜならば「慈しんでくれるただひとり」さえ失った境遇が、子供たちに薬を飲むことを、迫る比喩だからである。即ち、かわいい自分が、そのように、愛されないもっとも見下げ果てた境遇になることで、自分を愛したいために、誰のことも愛する・愛さないと区別したくなくなる「空」の理想に近づくからである。

他方、リアが区別を失っていく表現は、リアがゴネリルらに、嵐の中閉め出され、“Take physic pomp; / Expose thyself to feel what wretches feel,/ That

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

thou mayst shake the superflux to them. , . . . ”（3.4.33-35）と述べる点で、上記比喩の表現と本質的に一致する。

具体的には、リアが嵐の中けもののように閉めだされ、身の回りのものが「破壊されて何もない」けものの境遇を、上記の比喩のように“physic pomp”とするからである。けもののようなこじきエドガーを「真理の導き手」のように、“my philosopher”（3. 4.176）（意味“one versed in moral and intellectual science” *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* 859）と呼ぶからである。リアは裸に近いあわれなエドガーを見て、人間は所詮、あわれな二本足のけものである（3.4.101-108）と、「恒存的区別の否定」の真理を学び、どこにでもいるあわれな人々（Poor naked wretches, whereo’er [they] are（3. 4. 28））の憂えに気づき始めるからである。（LEAR“ O,　I have ta’en / Too little care of this! ”　（3.4.32-33）これまで知らなかった人々の思いに気づいて、心の届く範囲を延ばしている。

まず、“physic pomp”のけものの境遇は、「空」の破壊された後何もないことに共通し、リアが“Nothing”のようなどうでもいいもののように、嵐の夜追い出されたことである。また、“physic pomp”のけものの境遇の表現は上記の比喩と違い、誰からも愛されない状態でなく、娘に愛されず捨てられるような価値の人間であるという、絶望（「何もない」状態）である。その証拠に、シェークスピアは道化を用いて、リアが、リアでなく「リアの影法師」“Lear's Shadow”（1.4.239）であると表現し、劇中でも、王でなくなったリアは、父でもなく、女王の友人でもなく、人間でもなく、“Nothing”であると、表現される。ゴネリル、リーガンはリアに別に屋敷にいてほしいとは思わない。リアの行き場は、嵐に住むけものの境遇だからである。次に、第三の「心の届く範囲を延ばすこと」について、『リア王』と以下のように本質的一致が見られる。上記引用で、リアがあれほどなりたくなかったけもののような、こじきのエドガーを、自分の分身のように思って、“Didst thou give all to thy daughters?”（3.4.50）と尋ねるからである。そして、リアは、「空」の第一「自分と世界への恒存的区別」の否定に共通し、エドガーを“my philosopher”と呼ぶ。つまり、シェークスピアはエドガーをリアの“philosopher”とし、その真理の姿は二足獣なのである。この真理の二足獣は、区別の全くなくなった人間の状態を意味し、日常的世界観の払拭の結果である。その証拠は次の通りである。「他の動物から借りなければ」人はけものにすぎぬとの表現（ [beggar Edger] ow’st the worm no silk, . . .” “unaccommodated man is no

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

more but such a poor, bare, forked animal as thou art. Off, off, you lendings (3. 4. 106, 109-12)) は、他の動物の皮の多寡を、愛や名声に置き換え双方競う、日常的世界観に言及している。また、けものになくて、人間にあるこれらのものをシェークスピアが「余計な」と表現して (3. 4. 33-35)、上記の恒存的区別をよしとしていないからである。

しかし、リアが、この後も罪人と罪なき自分という新たな区別の世界観を抱いている点で、「空」についての３つの特徴と、完全には一致していない。なぜならば、リアは自分を殺そうとした非情なゴネリルらに比べ、自分のことをまだそこまで愛されぬ人間だと思っていないからである。故に区別する余裕が残っているからである。リアの善悪の区別については、リアは自分をかわいそうな「罪を犯した覚えのないもの」と区別して保護する（I　am a man / More sinn'd against than sinning (3. 2.55)。自分の分身の、かわいそうな人々を作り出す ". . . thou bloody, /Thou perjur'd, and thou similar of virtue/ That are incestuous" (3.2. 53-54) などの罪びとの罰を、嵐の中見えない神々に依頼する。

第二に、リアのさらなる理性を失う物語は、自分と世界について考えてきた物語を失う物語である。第二の区別の喪失は、「良医の譬喩」同様、自分に生死の危機をもたらした破壊者が、自分と同じ性質の人間であると認めるという精神的破壊（「破壊されて何もないこと」）によって訪れる。区別できない境遇になる。ゴネリルらがリアを閉め出す罪を犯したように、リアが無実のコーデリアを無一文で追放した罪に気づくからである。嵐の折「罪を犯したもの」に、自分がなってしまい、依頼した神々の罰が自分にふってくるからである。

精神的破壊の訪れた証拠として、以下のように罪人の範疇に、自分が入っている危機を感じている。リアを救出にきたコーデリアに、リアは次のように告げる。

> If you have poison for me, I will drink it.
> I know you do not love me, for your sisters
> Have, . . . done me wrong;
> You have some cause, they have not. (4. 7. 72-75)

この時リアは、罪のあるなしで愛されるべき権利の多寡が決まるという、恒

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

存的区別を信じることで、自分を精神的破壊に追いつめている。なぜならば、自分が罪人を区別し、毒を飲ませたいと憎むので、コーデリアのために罪人の自分も毒を飲むと告げるのである。それは精神的な死である。嵐の折、リアが "Crack nature's moulds, all germens spill at once/ That make ingrateful man!" (3.2.8-9) と、自分を破壊しようとしたゴネリルら罪人が生まれないことを願い、憎んだ分、リアは自分の罪の意識で、死のあがないへと追いたてられるからである。

リアが善悪で人を区別し憎んだ、自分と世界についての物語、生きる意味と理由をなくする。これは「空」の第三の特徴、恒存的世界観の否定と、本質的に一致する。

証拠として、まず、シェークスピアが人の区別をなくすることを理想としている。コーデリアが、「理由はありません」"No cause" と述べ、理由で苦しみを作り始め、理由から逃れられなくなっているリアを、無条件に解放するからである。

本質的に一致する証拠は、次のようなシェークスピアの諸表現にある。救出に来たコーデリアに述べるリアの台詞 "I am mighty abus'd.I should e'en die with pity,/ To see another thus. I know not what to say." (4.7.53-54) は、リアの自己定義が、王の自信から、あわれなものの保護者、想定外だった悪党まで、あまりにも急激に変化してもう考えがうかばず、自分なるものを表現しきれなくなっている現れである。リアの "I will not swear these are my hands." (4.7.55) という台詞は、なんの救いもなく自分を尊重する手立てがないこと、自分であることに、もはや耐えられず、自分が自分としていることに関心をそらしている兆候である。さらに、リアがコーデリアを勘当した後初めてコーデリアの元へ向かう途中に、リアは狂気に陥り、お金を想像のお金と区別なく表現する。"No, they cannot touch me for coining; I am the king himself." (4. 6.83) それは何も持たない男のままごとじみた空想の世界のお金である。また、同場面では、何を意味するのか不可思議なことに、エドガーにリアが要求する「合言葉なる」通行手形、帽子の羅紗で騎兵一隊に作る靴、想像の身代金が登場する (4. 6. 93-95, 185-87, 194)。これは以下の「火宅の譬喩」と同様、「空」の第一の特徴、恒存的区別の観念の否定を描いている。

怖ろしい心のヤクシャどもは、[9] 他の生きものを食って満腹したとき、

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

他の生きものの肉を食って四肢の肥満したかれらは、その家で、激しい争いをする。そして・・・その家が突然に燃え上がったとせよ。（自分の子供たちの誰も焼け死なないようにと、父に）諭されたにもかかわらず、子供らは遊びに夢中になり、父の言葉を考えず、また気にもとめない。（『法華経』上 185-93）

この比喩では、お互いの利害、強弱の区別のために戦うことを子供の遊びと認識し、遊びのために人命が失われる仕組みが描き出されている。ヤクシャは「遊ぶ」子供たちそのものの喩えと考えられる。また、「遊ぶ」子供たちはわれわれ人間の喩えである。ここから、リアの言説は、火宅の喩え同様に、金銭のやりとりなどを「想像世界」の遊びと認識しているとの表現と、考えられる。その証拠は、リアの不思議な世界の導入部は、リアがゴネリルらのへつらいに騙され、捏造の想像的世界を現実と信じたとの告白であり（4. 6, 97-106）、（例 “. . . :they told me I was every thing: ’tis a lie, ...” （4. 6. 106-8））それを元にリアが既成の想像世界と縁を切って、自由に思い描く想像的世界で遊び始めるからである。[10] 従って、ものの区別を失っていくリアの思想は「空」の第一、第二、第三の特徴と本質的に一致する。

『法華経』と『リア王』との相違点は次の通りである。相違点は、リアがこの「空」の思想の本質を表現しても、なお、コーデリアを目の前で殺した隊長を刺し殺すなど、「空」に似ている知識から、行動が離れている点にある。例えば、コーデリアに、“. . . ; and we’ll talk with [poor rogues] too,/ . . ./ who’s in, who’s out; . . . / As if we were God’s spies: . . .” （5. 3. 14-17）と、一切の区別から解き放たれた知識を語るが、同時に、姉娘らの早死にを願うのである（5.3.26）。しかし、ディケンズが、リアがコーデリアまでも失った後、死んだコーデリアを見ながら、道化への愛情に思いをはせているとコメントしている点、[11] 忠臣ケイアスは死んでいないのに、リアはコーデリアが死んだように、ケイアスまでも死んだと思う点など、人の区別が感じられない特異な愛情が劇中で表現されている。『リア王』の奥深い “Nothing” の意味についてはまだ確定できない。

5. 結論

以上見てきたように、本稿は、シェークスピアの “Nothing” の思想を研究

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

するために、『法華経』の「空」と比較考察した。コーデリアの "Nothing" の思想がいかに、劇中のリアによって体現されているかを考察した。第一に、コーデリアの愛情表現 "No cause" をあらゆる価値を超えたリアへの愛と想定し、リアが物質的にも、恒存的観念においてもあらゆるものをなくしたかを究明した。第二に、証拠として、リアの言葉と「空」に関する三つの特徴的表現を比較考察した。

『リア王』と『法華経』の本質的に一致する点と相違点は以下の通りである。「空」に関する第一から第三の特徴は、次の点で『リア王』の "Nothing" の思想に本質的に一致する。あらゆる価値や空間を越える愛情が、あらゆる価値や空間の観念を失ったリアを、コーデリアが「理由なく」愛することで実現するからである。それは、破壊された後何もなくても愛する愛、一切のものに区別がなくても愛する愛、自分の存在と世界についての思いが表現できなくなっても、愛する愛、あらゆる境遇の人に心の届く範囲を伸ばそうとする愛を表現していた。リアは劇中の各所で、コーデリアの、「空」に近しい "Nothing" の思想を具体的に体現した。リアは、「空」の第一の特徴、自分の存在と世界についての思いが恒存的に表現できなくなることを体現し、区別できなくなっていくこと、第二、破壊されて何もなくなること、第三、「心の感覚を延ばすこと」をある程度実現した。相違点は次の通りである。シェークスピアの "Nothing" の思想を体現するリアが、「空」にまつわる観念を表現しながら、人を区別する行為をするなど、『リア王』と「空」の観念に相違点が見られた。しかし、シェークスピアの理想と思われる、次のフランス王の言葉をリアとコーデリアが実現する点で、「空」の思想に共通すると考えられるのである。フランス王は "Nothing" の言葉で勘当されたコーデリアについて語る。"Fairest Cordelia, that are most rich being poor,/ Most choice forsaken, and most lov'd despis'd,/Thee and thy virtues here I seize upon. (1.1.245-47) もっとも見下げ果てた愛されないものへの深い愛情を獲得するというパラドックスは、「空」の思想の本質に一致すると結論づけられる。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

註

[1] 『リア王』の創作年代は Evans による。

[2] 『法華経』は釈迦の説法の形式で描かれ、サンスクリット語の書である。成立年代は未詳である。分派してきた仏教史の中で、『法華経』というインド原書の歴史的立場は以下の通りである。

> ・・・ブッダ（釈迦）が説いた縁起説 [すべての存在は種種の条件（これを因縁という）によって、そのようなものとして成立している（上 382）] を超克して、「空」の思想によって包摂しようとしているが、なお未だに一元的な観念論には到達していないのである。・・・『法華経』は大乗仏教の系列に属するが、なおその初期に属することが知られよう。(『法華経』上 371)

[3] 「「空」の教えを完全に理解し、深く瞑想に入っていることを知るとき、如来（真理に到達した人）は『今こそ時期である』と知って・・・その意義を説き聞かせるのである」（中 71)。その意義とは『法華経』の意義を指す。詳しくは『法華経』下の註釈 440-42 頁。

[4] 『リア王』と『法華経』に共通して見られる「ないこと」の思想は特徴的である。一例として、同様に「何もかもなくなること」に備えてはいても、性質の異なる思想のうち、ルネッサンス期が大いに影響されたとするギリシア文化の例を挙げる。歴史的研究からギリシア文化の「自己の陶冶」を語る上で、フーコーは、セネカ（前 4 頃 - 後 65）の理想を次のように特筆するからである。「人間のあらゆる偶然を脱して運命の支配を逃れた部分」は「自分自身の過去へと向かっていき、その思いにふけり、意のままに自分の過去を眼前にくりひろげ、そして、何ごとによっても乱されない関係を自分の過去に対してもとことができる」（フーコー 87）である。

[5] 以下『リア王』の訳は福田恒存による。

[6] 「眼を閉ずれば則ち得、眼を開けば則ち失う」は『観普賢菩薩行法経』から引用。この書と『無量義経』、『法華経』三巻を合わせて、『法華経』の全体像を成す。

[7] 『法華経』の註では、この直接的・間接的条件は因縁とされている（中 367)。同註で、因縁は縁起という教説の中で次のように説明される。「縁起――・・・この世に存在する一切のものは、因縁――直接的原因を「因」といい、間接的原因を「縁」という――によって生ずるという教説」（下 402)。

[8] 「一切のものの本質がないこと」（空)、「一切のものに差別の根拠となる形状がないこと」（無相）(『法華経』上 293)

[9] 「神怪の一種で、・・・時に兇悪な悪魔ともされる。」(『法華経』上 379)

[10] ハウはリアのこの種の行為を "child's play" と表現している（185)。

[11] Dickens, Charles. "The Restoration of Shakespeare's *Lear* to the Stage," *Examiner*, ed. John Forster（4 Feb,1838）Cf. Thomas B. Stroup, "Cordelia and the Fool", *Shakespeare Quarterly*, 12（1961）127-132

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

引証資料

Brook, Peter. *The Shifting Point*. New York: Theatre Communication Group Inc.,1987.

Eagleton, Terry. *William Shakespeare*. Oxford: Basil Blackwell. 1986.

Howe, James. *A Buddhist's Shakespeare: Affirming Self-Deconstructions*. Fairleigh Dickinson University Press, 1996.

Kosuke Oka. "'Nothing' in *King Lear* and 'Mu' in Buddhism"『人と言語と文化２』木原範恭ほか. 東京：近代文芸社、2004.

Ran. Dir. Akira Kurosawa. Toho, 1985.

Reeves, Geoffery. 'Finding Shakespeare on film: from an interview with Peter Brook' *Film Theory and Criticism: Introductory Readings*. Ed. Gerald Mat. New York: Oxford University Press, 1974.

Saddharma-Pundarīka or The Lotus Sūtra of the True Law. Trans. Hendrik Kern. Ed. Max Müller. The Sacred Books of the East. 21. 1884. Delhi: Motilal Banarsidass, 1965.

Santayana, George. *Interpretations of Poetry and Religion*. New York: Scribner's, 1900.

Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. vol.2. New York: Dover Publications, 1971.

Schmidt, Kurt. *Buddhas Lehre, Einfuhrung*.（2.neu bearb. Aufl.）Konstanz: Weller & Co., 1946.

Shakespeare, William. *King Lear*. Ed. Kenneth Muir. The Arden Shakespeare. London: Muthuen & Co. Ltd., 1955.

——*The Riverside Shakespeare*. Ed. G. Blakemore Evans. Boston: Houghton Mifflin Company, 1964.

Skulsky, Harold. 'King Lear and the Meaning of Chaos.' *Shakespeare Quarterly*, 17（1996）: 3-17

Stroup, Thomas B. "Cordelia and the Fool", *Shakespeare Quarterly*, 12（1961）127-132.

Saddharmapuṇḍarīka, 'Bibliotheca Buddhica X'Ed. H Kern and B.Nanjio, St.Pétersbourg, 1912.

坂本幸男・岩本裕訳註『法華経』上、中、下 東京：岩波文庫、1976.

シェークスピア、ウィリアム、福田恒存訳『リア王』東京：新潮社、1967.

ズィークムント、ゲオルフ、中村友太郎訳『仏教とキリスト教』東京:エンデルレ書店、1972.

多田孝正校註『法華経下　観普賢菩薩行法経』東京：大蔵出版、1997.

中村元『佛教語大辞典』上巻、下巻 東京：東京書籍、1976.

Foucault, Michael. Historie de la sexualite III, souci de soi. Paris: Gallimard, 1984.

（フーコー、ミシェル 田村淑訳『性の歴史 III 自己への配慮』東京：新潮社、1987.

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

Synopsis

A Critical Comparison between Both *Hokekyo* and *King Lear* with Respect to the Concept of Nothingness

MATABE Miki

The purpose of this paper is to discuss a paradox in *King Lear*. Specifically the paradox concerns Cordelia when the King of France says about her, "Fairest Cordelia, that are most rich being poor, / Most choice forsaken, and most lov'd despis'd, / Thee and thy virtues here I seize upon." (1.1.245-47)

The paradox derives from the effectiveness of nothingness that Shakespeare was supposed to attach importance to in the play. This became clear after I studied and compared the manifold interpretations of valuable nothingness in *Hokekyo* and *Lear*. *Hokekyo* is one of the most famous and important Buddhist writings and in my analysis is taken as mainly philosophical. This is line with Kurt Schmidt, who argues for the absence of religion in *Buddhism in Buddhas Lehre*, *Einfuhrung*. (9)

My focus is on the similarity between the concept of "nothingness" in *Lear* and the term "Kū" in *Hokekyo*. "Kū" means the truth "by developing the idea of vanity (or voidness (sic)) is ignorance suppressed. (*The Saddharma-Pundarîka* 135) Similarly, George Santayana rightly observes that Shakespeare depicts human life as a "life without a setting, and consequently without a meaning." (154) The assumptions can be both the settings and the meanings when James Howe states ". . . Lear's pain forces him to interrogate his own assumptions about both the world and himself. (183) Surely, Lear says, "This is not Lear: . . . ." (1.4.233) "Who is it that can tell me who I am?" (1.4.238) ". . . for by the marks of sovereignty, knowledge, and reason, I should be false persuaded I had daughters. (1.4.241)

It is hoped that this paper will provide a critical comparison between both *Hokekyo* and *Lear* with respect to the concept of valuable nothingness, clarifying Shakespeare's enigmatic ideas on the subject

NII-Electronic Library Service